

# < 実践事例 羽村市立武蔵野小学校 >

## 1. 取組・活動名

【A: 世界の人と生きる B: みんなと生きる (障害者理解)】

## 2. 取組・活動のねらい

A	「世界ともだちプロジェクト」での交流国の学校と本校が様々な手段でコミュニケーションを取ることを通して、互いを理解・尊重し合う気持ちを育む。
B	オリンピック・パラリンピック教育を通じ、障害のある人々への理解を深め、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える共生社会を目指す児童の育成を図る。

## 3. 教育課程上の教科名・時数

【総合的な学習の時間】

世界の人と生きる (6年生20時間) みんなと生きる (5年生20時間)  
 みんな地球の子供 (4年生20時間) ようこそ羽村へ (3年生10時間)

## 4. 実施上の工夫

A	<ul style="list-style-type: none"> <li>一度だけの取組ではなく、年間を通してEメールでのやり取りを行い、長期にわたって様々な交流ができるようにした。今回は、Eメール以外に外国語活動の授業「自己紹介をしよう」とも関わりをもたせ、テレビ電話での交流も行った。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童が充実した体験を行えるように、実践を取り入れるなどの指導計画を工夫した。また、児童が「楽しい」、「おもしろい」と感じることができる内容を精選し、そこから学習する内容を全職員が共通理解して取り組んだ。</li> <li>外部講師をお招きし、「ブラインドサッカー」、「パラディスボール」、「車椅子バスケットボール」について、体験を通して学ぶ機会を設定した。</li> <li>羽村市が主催する「羽村市東京2020パラリンピック1000日前イベント」の会場校となり、児童が多く参加できる場を設定した。</li> </ul>

## 5. 本取組・活動の内容



本校での様子



相手校の様子

### A 「交流国とのメール交換」

- 年間を通じて、本校6年生がフィンランドの小学校とEメールでやり取りを行った。
- それぞれの学校の様子を紹介するだけでなく、互いに趣味や生活に根ざした質問をして相互理解を図った。また、外国語活動で学んだ自己紹介を、テレビ電話で実践した。
- 他の学年では、1年生が育てたアサガオの種、2年生が作成した折り染めをクリスマスカードとともにルーミアの小学校へ送った。
- アサガオを育てる様子や折り染めで遊ぶ様子がEメールで返信され、交流のよさを実感できた。

### B 「情報は友だち パラディスボールを体験しよう」

- 東京都教育委員会が推奨している教育支援プログラム集の中にある「パラディスボール」を教材にしたプログラムを行った。
- パラディスボールは、アイマスクをすることで、参加する全ての人が同じ条件で行うことができるゲームであり、とてもシンプルだが、実際に見るのとするとでは感覚が異なり予想以上の難しさを体験することができた。
- 「見えない」ということの体験、相手への配慮、情報を伝達することの大切さについて学びを深めた。



### B 「ブラインドサッカー体験」

- 前半はアイマスクをして見えない状態で友達と声を頼りにグループを作ったり、見える友達に声をかけてもらったりし、まっすぐ走ったりする体験を行った。
- 後半は、アイマスクをして音が鳴るボールを捜し、ゴールに向かって蹴るなど、ブラインドサッカー体験を行った。
- 体験を通して、「見えない」ことの恐怖や苦勞を理解することができ、周りのかけ声やサポートで、大きな安心感が得られることに気付くことができた。



## 6. 成果

A	<ul style="list-style-type: none"> <li>海外の小学校の様子をEメールや写真などの交流を通して知り、生活や文化の違いについての学びを深めた。相手意識をもった考え方やコミュニケーションのとり方が、以前よりもできるようになった。</li> <li>更にもっと英語を学びたい、また外国の方と交流したいという気持ちが高まり、外国語活動の学習に積極的に取り組む児童が増えた。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>パラリンピアンや外部講師との交流から、スポーツの魅力や楽しさに触れ、自らすすんで運動に親しもうとする意識を高めることができた。</li> <li>障害や障害者スポーツについて知り、障害のある方々の考えや日々の努力への理解を深めることができた。また、障害者スポーツについて、興味、関心が高まった。</li> <li>障害は特別なものではなく、自分たちの苦手なことと同じであるという意識を児童にもたせることができた。自分たちができるだけ障害をつくらないようにしていこうとする意識が高まった。</li> </ul>